

汪笑農と天津戯劇改良社

——民国初期の通俗教育の一環としての戯曲改良——

鈴木直子*

Wang Xiao nong and Tianjin Xiju gailiangshe

traditional drama reform as a part of popular education in the early Republic of China

SUZUKI Naoko

abstract

Xiju gailiangshe was founded in 1912 before. Wang Xiao nong as leader wrought with dramatic reform. Because he was a traditional drama (Beijing opera) actor then, produced remake new drama. The reason why they did take a positive attitude to dramatic reform in Tianjin, is that educational circles expected enlightenment role by drama. Educational institution also paid attention to that enlightenment role, dramatic reform were build into popular educational policy.

Traditional drama was regarded as immoral, at the end of the Qing dynasty, it was under the control of the police agency. When arrived the Republic of China era educational institution began to have concern for dramatic reform.

This study especially take case of Tianjin for Example, case of Tianjin makes it clear that the relationship of dramatic reform between educational policy. A few person of educational circle in Tianjin, they had since tried to promote new drama at the field of school education.

In this study, I would like to prove that relationship of drama reform between educational policy, to emphasize new drama had an enlightenment role.

Keywords : Wang Xiao nong, Tianjin Xiju gailiangshe, drama reform, popular education, the early Republic of China

序.

中国では清末の改良戯曲や民国期に起こった「新劇」の段階を経て、1920年代半ばにようやく近代劇に相当する話劇が形成されていく。初期の話劇形態としての「新劇」は、上海一帯では「文明戯」として、北京、天津方面では学生を主体とした課外活動として盛んになるが、特に天津の南開学校での新劇活動は、北方での新劇運動の嚆矢と見なされてきた。『中国早期話劇選』（王衛民編、中国戯劇出版社 1989年）には文明戯作品と共に南開学校新劇団の三作品が収録されており⁽¹⁾、また『中国文化芸術叢書中国話劇』（田本相主編、宋宝珍、王衛国文化芸術出版社 1999年）においても文明戯と共に南開新劇を「中国話劇の起源」として位置づけている。

だが、北方での新劇活動の始まりは、南開学校から突如発生したのではない。上海での文明戯が、清末の戯曲

キーワード：汪笑農、天津戯劇改良社、戯曲改良、通俗教育、民国初期

*平成12年度生 比較社会文化学専攻

改良とも繋がりを持っていたのと同様、天津においても清末から民国初年にかけて戯曲改良の動きが見られる。『中国話劇史』(葛一虹主編 文化芸術出版社 1990年)では1908年の夏に王鐘声率いる春陽社が北京、天津で行った公演を北方での新劇の最初として挙げているように、戯曲に改良を加えることから新劇創出の模索が開始されたのである。そしてこの時期の戯曲改良は、通俗教育と密接な関わりを持っていた。

筆者はすでに五四時期の南開学校新劇団や北京大学新劇団の活動に関する論をまとめたが⁽²⁾、本稿では北方での学生演劇が発生する前段階について考察し、特に天津における改良戯曲運動と通俗教育との関連を解明したい。戯曲改良が新劇の形成さらには現代劇としての「話劇」の形成にどう結びついていくのかという問題について、本論で天津の例を挙げるのは、天津での戯曲改良と南開学校の新劇に人的な関連が見出せるからである。天津戯劇改良社や芸劇改良社に携わった嚴範孫や林墨青のような教育家たちは、南開学校の祖でもあり、南開での新劇活動を積極的に提唱した。民国初年に天津での戯曲改良の使命を担っていたのが戯劇改良社であり、前述の嚴範孫により推薦されて戯劇改良社の責任者となったのが汪笑儂であった。

本稿では天津での新劇活動の契機や動向について、戯劇改良社と汪笑儂に着目し、当時の新聞報道(『大公報』天津版)や演劇雑誌記事を材料に、従来の通史的な先行研究ではそれほど触れられなかった部分を検証していく。また天津の戯劇改良社の誕生した契機として、民国初期の教育制度、通俗教育と演劇との関連性を指摘し、当時の新劇に求められた「啓蒙」という側面を明らかにしたい。

1. 天津での戯曲改良運動

天津で戯曲改良の動きが現れたのはいつ頃からか。先行研究である『中国戯曲志・天津巻』(中国戯曲志編集委員会編 文化芸術出版社 1990年)に基づき、以下に整理しておく。

まず光緒三十三年(1907年)に創立された移風学会(会長は劉駿、劉子良)で改良新劇『悔前非』等を上演したのが始まりという。同劇は社会風紀を変え、文明をもたらしたとして人気を博すが、同会は経費不足で一度は活動を停止する。光緒三十四年に復活し、『好男兒』『醒世因縁』等を上演。宣統三年(1911年)、同会の創作劇を各戯園に推奨しこれに倣うよう定めた。改良新戯とはいうものの、上演の際には旧来の歌唱を用いていた。同年5月以降は『新教子』(自由結婚を提唱するもの)、『治魔鬼』(人権を提唱するもの)、『家庭教育』(母教を提唱するもの)を試演し、『潘烈士投海』『国恥記念日』などの劇を上演した。

次に宣統三年(1911年)の8月には、学、報、紳、商各界から郭宗漢、姚志祖、辛鳴培等19名の発起人により新劇の編集上演、風俗改良を旨とする社会教育倶楽部が成立した。同年10月に『潘烈士投海』を上演したという。

そして民国元年になると、京劇俳優李吉瑞(1868-1938)等の提唱により、天津警察庁批准を経て正楽育化会が成立する。会長は李吉瑞、副会長に汪笑儂、尚和玉(京劇俳優、1873-1959)、薛鳳池(京劇俳優、1882-1921)が選ばれた。育化会は最初南市燕楽茶園にあり(後に鍋店街山西会館の隣に移転)、精忠廟の固定資産を監理し、募金や義務劇等の収入を貧しい芸人の救済に当てた。1938年に李吉瑞が亡くなった後は、梨園公会と改名し、陳天麟が会長となった。ちなみに北京でも同様に正楽育化会が成立しているが、民国元年に提議され民国三年に成立したという。

以上のように、天津では光緒三十三年から戯曲改良の動きが起こるが、この光緒三十三年という年は「風俗に妨げある演劇の上演は厳禁すべき旨の政令が、布告された」⁽³⁾年であった。戯曲の改良は風俗改良の強力な手段であり、さらには社会改良や民衆教育に有効であるとの認識を当時の知識人はすでに抱いていたのである。

宣統三年には社会教育倶楽部という「社会教育」を謳った会で明確に風俗改良を目的とし、さらに民国元年には廟の監理を行う正楽育化会が警察庁の批准で成立し風俗改良の一層の強化を図った。警察庁の批准を受けてというのは、まず日本の明治の劇壇において「演劇改良論は、すべて演劇の効果を借りて、社会啓蒙運動の一助たらしめようといふ立場から唱へられたもので、従ってその限りに於て、低級な脚本の改良・鄙猥な脚本の上演禁止といふ問題を含むものであったが、又さうした改良論が行はれる一面に於て、純然たる警察制度の確立といふ側から、脚本の内容並に劇場の警察の管理といふことが、やうやく留意される様になった。」⁽⁴⁾といい、その後中国においても「劇場の改良のみならず、風氣(風紀)の維持・向上といふ立前(建前)から、警察が脚本・演出・劇場などの監督をすることの必要性も、次第に認識されるに至って、当代の新聞・雑誌などには、さうした

意見を反映した論文が屢々紙面を飾る様になった。」⁽⁵⁾ という。その結果、光緒三十三年には風俗に妨げある演劇が禁じられ特に警察に対して取締を行う政令が布告されたというから⁽⁶⁾、清末には劇場の管轄が警察にあったことがうかがえよう。

上述の正楽育化会で副会長を務めたのが汪笑儂であり、彼はその後戯劇改良社社長となり天津で戯曲改良に尽力する。次節ではこの汪笑儂及び戯劇改良社について詳しく述べていく。

2. 汪笑儂と戯曲改良

汪笑儂に関する先行研究には以下のものがある。一つには板谷俊生『汪笑儂——改良演劇と『二十世紀大舞台』』⁽⁷⁾、そしてもう一つが傅秋敏『論汪笑儂的戯曲改良活動』（『汪笑儂の戯曲改良活動を論ず』）⁽⁸⁾である。前者板谷氏の論文では、汪笑儂の上海時期、とりわけ1904年に雑誌『二十世紀大舞台』（詳細後述）を創刊する経緯を詳細に紹介したものであるが、天津時期の汪笑儂に関する記述は少ない⁽⁹⁾。後者の傅氏の論文は汪笑儂の作品論を主とするものである。いずれも汪笑儂と天津での戯曲改良に関する言及のみに止まっている。

汪笑儂の伝記には以下のものがある。『中国戯曲志』では天津巻、北京巻共に記述がある他、『春柳』（大同による「汪笑儂略史」）⁽¹⁰⁾や『菊部叢刊』⁽¹¹⁾にも記述されている。こうした先行研究を参考に、以下に汪笑儂について整理してみよう。

汪笑儂（1858年－1918年）は京劇劇作家兼俳優。満州族で本名を徳克金、又は孝農と言ひ、号には仰天、竹天農人がある。北京生まれで同治十三年（1874年）に八旗官学に入り、光緒五年（1879年）に科挙に合格するものの、出世を嫌い、戯曲を愛好し、北京の三慶徽班に通いつめた。また票房（素人演劇同好会）である翠鳳庵に入り名優孫菊仙等に京劇を習う。光緒中、天津にて役者に転身し、汪篠儂と名乗る。光緒二十七年（1901年）に上海に行き、職業俳優として舞台に立つが、翌年に名優汪桂芬にその芸を笑われたことから汪笑儂と改名したという。その後汪は崑曲を京劇に改編した『党人碑』（崑曲『党人碑』改編、南宋時代を舞台に岳飛が秦檜に殺害されたことを知った胡迪が閻羅を痛罵する、戊戌政変を契機に創作した）や『馬前潑水』（崑曲『爛柯山』改編、東漢の会稽太守朱買臣の「覆水盆に還らず」の故事による。朱買臣が出世前、貧しさを憂いた妻崔氏が朱と別れ他の男と「自由結婚」する。後に官となった夫を見て、崔氏は今度は「自由離婚」して朱の家に来るが朱は「地面に撒いた水を拾えたら妻として迎えよう」と相手にしない。当時起こった「自由結婚」に対する諷刺劇）、『哭祖廟』（『三国志演義』第百十九回による。蜀の劉禪が魏に投降するのを息子劉禪は咎めるが、聞き入れられず、劉禪は妻子を殺し劉備を祭った祖廟の前で自刎する。）といった当時直面している時勢を歴史に託して謳い上げる諷刺劇を創作⁽¹²⁾、上演し、や『瓜種蘭因』（別名『波蘭亡国慘』）で京劇の衣装ではなく洋装で演じた「洋装新戯」により改良演劇の元祖として有名になった。そして汪の改良演劇に着目した『警鐘日報』主幹の陳去病（1874－1933）と中国初の演劇雑誌『二十世紀大舞台』を創刊する。同誌の簡章によれば「本報は悪俗を改革し、民智を開き、民族主義を提唱し、国家思想を喚起することを以て唯一の目的とする」⁽¹³⁾というように、当時の社会改良を目的とする雑誌であった。陳が汪に着目した点については、板谷氏が「資産階級革命派の文人たちが作った政治宣伝のための戯曲というものは、京劇の規律や特徴を完全に無視したものであり、戯曲以前の類としか受けとめてもらえなかった。そこで、陳去病は進歩的芸人との合作を急務と考え、ついに、汪笑儂に白羽の矢を立てたのだった。汪笑儂は伝統的京劇を自ら演じもすれば、また脚本を創ることもできた。そして、演劇という手段で愛国思想を観客に訴え続け、好評を博していた。」⁽¹⁴⁾と述べている。知識人でもあり役者でもあった汪笑儂は、創作した脚本を舞台上で実践し表現できる人物であった。また、汪笑儂の改良戯曲の特徴として板谷氏は「京劇の（従来の台詞の規範である）七言、十言のきまりを破った」「（『瓜種蘭因』において）劇中人物の姓名の紹介だけではなく、各々の職業や年令の紹介まで行った」「念白（台詞）と新名詞が多い」「時装戯」（京劇の演目の時代に合わせた衣装ではなく、上演当時の服装で演じる）という点を挙げている⁽¹⁵⁾。上海に出てからは、汪笑儂が戯曲改良を試み、光緒中にはすでに改良演劇の祖として名の知れた人物となっていたことが分かる。

その技量を買われてか、宣統二年（1910年）になると済南の戯劇改良社の主任を任されることになった。当時の省の教育方針「戯劇により教育の不足を補う」ことを目的にしてのことだという⁽¹⁶⁾。この済南戯劇改良社については短命に終わったようで、詳細は不明である⁽¹⁷⁾。

翌年宣統三年（1911年）に汪笑儂が天津にいたという記述が徐半梅の『話劇創始期回憶録』に見られ、12月に同じく戯劇改良家である王鐘声⁽¹⁸⁾が逮捕、銃殺されたのに関わったとある⁽¹⁹⁾。しかし徐半梅のこの記述は誤りで、吉川良和氏の考証によれば、王鐘声がいたのは「社会教育の演劇改良を推進していた移風楽会会長・劉子良の家」⁽²⁰⁾であり、『大公報』での報道を見る限り汪笑儂の名は出てこないという⁽²¹⁾。王鐘声が逮捕前に接触した人物が劉子良であったというが、移風楽会は前節でも述べたように戯曲改良にいち早く取り組んだ組織であり、劉は王鐘声と戯曲改良という点で繋がりがあった。「移風学会会長劉子良の家で起義の申し合わせをした所、機密がもれ、直隸総督の陳夔竜の指令で楊以德に逮捕され」⁽²²⁾革命に関わっていた王鐘声が銃殺されてしまう。戯曲改良家として同時期に活躍した王鐘声亡き後、汪笑儂が天津で戯曲改良教育に従事することになるのは民国元年を迎えてからであった。

3. 天津における戯劇改良学会

民国元年に汪笑儂は戯劇改良社の主任となった。『中国戯劇志・天津巻』によれば、当時天津では、戯劇改良社と芸劇改良社という二つの戯劇改良学会が存在したとされる。同書に基づき、以下に二社について整理している。

まず戯劇改良社だが、辛亥革命以前に提学（地方の学校行政監督）であった蔡志賡により戯劇改良と旧習改革を旨として成立した。民国元年に汪笑儂を責任者に推薦したのが嚴範孫（嚴修、南開学校の始祖）である。嚴範孫（1860-1929）は清朝の翰林院編修や学部侍郎等の職を務め、私塾を開き後に南開学校創立に関わるなど、天津の近代教育の発展に貢献した人物である。嚴と共に戯曲改良を推し進めたもう一人の人物が林墨青（林兆翰、1862-1933）で、林は直隸学務処参議や津郡学務総董、天津県勸学所総董、社会教育弁事処総董、広智館館長及び『広智星期報』社長等を歴任した。嚴、林は元々演劇愛好者であり、嚴は「脚本に改良を加えれば、その功は教育に下らず」と語っていたという。二人は戯曲改良を「移風易俗」つまり風俗改良の手段とし、社会教育の内容に加えた。また汪笑儂の自作自演演目『立国難』『党人碑』を賞賛し、蔡に汪を戯劇改良社の教師兼主任とすることを薦めたのであった。同社は民国二年三月に『代善侠』（別名『閉血針』）という演目を上演し、上演場所ではフィルムでも同劇の粗筋を紹介したという。だが活動も短命で、民国三年三月には閉鎖された。

もう一方の芸劇改良社は、やはり嚴範孫、林墨青により成立したという。有識者や戯劇改良社の社員が集い、定期的に新劇を研究し、旧演目の検討を行った。民国四年に天津県に社会教育弁事処が成立し、改良社もその管轄となる。以降、民国九年に至るまで、戯曲専門家と共に新劇創作や旧劇修正を行った。

以上の『中国戯劇志・天津巻』の記述だけでは、この二つの改良社の関係が分かりにくい。また『中国戯劇志・北京巻』の汪笑儂の伝記にはさらに「民国二年に科班（京劇俳優を養成する劇団組織、徒弟制で幼少期から訓練をし芸を伝授した）性質の易俗改良社を組織し、校長となり、多くの戯劇教科書を著す」とあるのだが⁽²³⁾、易俗改良社については未詳である。ここでは当時の新聞『大公報』での報道から戯劇改良社と芸劇改良社両者の関係を追っていくことにする。

1912年5月28日の『大公報』には汪笑儂の文字が見える。「劇界愛国」というタイトルで

日本租界の天仙茶園主管孫成興及び汪笑儂等が旧暦本月十五日義務劇一日を上演、茶代は全て寄付とし国民の天職を尽くす

という記事である⁽²⁴⁾。義務劇とはチャリティー公演であり、社会事業の一環として公認された上演のことで、誰でも発起し主催可能なものであった⁽²⁵⁾。ここから5月の時点で汪はずでに天津にいたことが分かる。ただ民国元年の汪の身分は、正楽育化会副会長と戯劇改良会主任であるが、この公演がどちらの主催だったのかは分からない。正楽育化会は「行会」つまり同業者組合であったのに対し、他の移風学会や戯劇改良社、芸劇改良社等は皆「学会」組織であった。正楽育化会が警察庁の批准を受け、のち教育部の管轄となったのは、「行会」が「学会」とは異なる公的な組織であるためだ。この記事上では特にどちらの組織名も無いため、汪は一個人として公演に参加したのかもしれない。

次に『大公報』上で確認できるのが、1913年の『代善侠』の上演である。「新劇開演有期」として

本埠戯劇改良社の上演する『代善侠』即ち『閉血針』の一劇及び各種改良旧劇は去年より学会処にて稽古練

習の後大いに改良を加え美を尽くし電影による劇中の粗筋の上映も加え完全なものとなった。劇界社員が集い南市大街広和樓茶園内にて陽曆三月八日（旧曆二月一日晩）一斉上演⁽²⁶⁾

とあるのでこれは『中国戯曲志・天津巻』の通りである。

1913年3月20日には、「育化会立案」という記事が掲載される。

名優李吉瑞の発起した正楽育化聯合会天津支部はすでに教育司の稟請立案に保護され東南城隅大悲庵内に弁事所を置き一切の手続きを進めるよう計画する⁽²⁷⁾

というから、この時点で正楽育化会が教育司の管轄となっていたことが分かる。

7月には「社長挙定」とする記事が掲載され、

林墨卿翰梯雲汪笑儂諸君の発起する芸劇研究社はすでに林墨卿君を社長とし東馬路勸学所址の共和党天津支部を事務所とする。毎週木曜と日曜の午後五時開会。各戯曲の改良風化のための編集修訂を行い、正楽育化会諸君には両開会日に参列し近日中に最良の新劇の発見をすべく極力事業を進めること⁽²⁸⁾。

とあるから、芸劇研究社の社長が汪笑儂ではなく林墨卿（林墨青か、京劇役者林顰卿の誤りか）であることが確認できる。

『大公報』掲載記事や広告から、正楽育化会は1913年に義務劇を数回上演しており⁽²⁹⁾、また上記の記事からも推察すれば、以下ようになる。最初警察庁の批准で組織された正楽育化会は、1913年に教育部の管轄となった。汪笑儂は民国元年には育化会の副会長であり、戯劇改良社の主任となったが、戯劇改良社に関しては『大公報』での記述が乏しい。これは前述したように、「行会」と「学会」という組織の性質の違いによるものと考えられる。

正楽育化会が教育部の管轄となった1913年からは、正楽育化会の関連組織であった芸劇改良社がその活動を活発にしている。1915年に戯劇改良社が活動を停止する一方、芸劇改良社は天津社会教育弁事処の管轄となっていたことから、戯曲の改良事業を推進する役割を果たす組織が、戯劇改良社から芸劇改良社へと移行したともいえる。

ただ短期間の活動とはいえ、戯劇改良社では汪笑儂の門下から鑑影、鏡影という後継者が出たというから、その活動もあながち無駄とはいえない。

4. 魯迅の新劇視察

以上民国元年から翌年にかけての天津での戯曲改良組織について述べてきたが、民国元年の天津での新劇状況に関しては、魯迅も視察を行っている。壬子年六月十日（民国元年7月3日）の魯迅の日記に、以下の記述がある。

午後、齊君宗頤⁽³⁰⁾と天津に赴く。その一族の家に寓す。夕方広和樓へ新劇視察に行く。曇りで停演となり、丹桂園で旧劇を観る⁽³¹⁾。

また翌日の日記には、

午後天楽園に旧劇を観に行く。夜広和樓にて新劇を観る。ただ『江北水災記』なる一劇のみ。（意気込みは）勇ましくて良いが、内容技量共に足らず。他は皆旧劇で児童が演じるものであり、観衆はわずか百三十人余り⁽³²⁾。

この時期、魯迅と齊宗頤は共に教育部の役人であり、二人は天津に新劇視察に訪れた。学習研究社の『魯迅全集』の訳注には「六月十日より十二日まで教育部の公務で社会教育司の同僚、齊宗頤（寿山）とともに新劇（現代劇）の視察に出かけた。」⁽³³⁾と教育部の公務であることを明記している。

また『大公報』にもこの時の上演に関する記事がある。六月十二日の「本埠」記事によれば、

中華新劇社が十一二十三日広和樓にて三日間義務劇を行う。総事務所調査部には来場賛助の旨すでに連絡済み⁽³⁴⁾

とある。恐らく新劇上演の通知を受け、調査部の人間が観劇にやってきたのではないだろうか。教育部の公務としてわざわざ視察に訪れていることから、当時新劇は京劇中心の北京よりも天津で積極的に行われていたものと推測される。

教育部と新劇の関係だが、民国期に入ると、新劇を含めた芸能は教育部に管理されることとなった。教育部に「社会改良」を目的の一つとする社会教育司が設立されたのは、1912年5月のことである。教育総長は蔡元培で、

彼に招かれ魯迅は教育部の役職に就き、教育部が5月に北京に移ってからは社会教育司第二科科长となった⁽³⁵⁾。新劇視察に同行した齊宗頤も当時は社会教育司第三科に所属していた。第二科というのは科学、美術を管轄し、第三科では通俗教育を管轄する役目であった⁽³⁶⁾。新劇視察は第三科の通俗教育に属し、齊宗頤の担当する職務であったと考えられる。なお社会教育司の詳細に関しては次節で述べたい。

この新劇視察で観劇した演目『江北水災記』について学研『魯迅全集』では訳注があり、「一九一二年六月、河北省東部の各県はひどい長雨に見舞われ、数十年ぶりに大きな被害を受けた。これらの地方はどこも浸水し、とくに天津、武清、宝坻がもっとも被害が大きかった（『魯迅年譜』第一巻、魯迅博物館魯迅研究室編、人民文学出版社）。『江北水災記』はこの実際の洪水を題材にした現代劇。」⁽³⁷⁾という。

劇場に関しても学研『魯迅全集』訳注では「広和楼、丹桂園はともに天津の南市大街にあったが、いずれも二流の劇場で、有名な役者が出演することはなかった。広和楼は1921年ごろにとりこわされ、丹桂園はのちに映画館にかわったという」⁽³⁸⁾と説明しているのだが、広和楼は1913年に戯劇改良社が上演をした劇場であり、丹桂園も正楽育化会の公演に使用されていることから、どちらも改良戯曲上演に一役買った劇場といえよう。広和楼は清末に南市で最も早く建立された劇場で、天津初の廻り舞台を備えていた。それにより背景を変える時間が大いに短縮されたというから、美術的な背景を使用する改良戯曲の上演に適した劇場であった⁽³⁹⁾。旧城市外南部にあった南市は、日本租界やフランス租界の境界に位置しており、いずれの租界からも管轄されない時期が続いたが、民国期に警察の派出所が出来、商売人や芸人が住み着くようになった。その結果劇場、映画館、茶園などが多く立ち並び遊興娯楽街となった地である⁽⁴⁰⁾。

「内容技量共に足らず」という魯迅の評価や、洪水募金のための義務劇であった点を考慮すれば、『江北水災記』という「新劇」は恐らくは観客に洪水の被害を訴え募金を呼びかける内容に終始していたと思われる。「新劇」とはいえ改良戯曲の段階であり、歌唱を用いていたのではないだろうか。「技量」の点でも「新劇社」の社員では京劇の名優とは異なり、素人から演劇を志した者、演劇愛好家が集っていたのだから、歌唱力、演技力とも「不足」というのも当然のことであろう。

5. 社会教育司と通俗教育

前節で魯迅の新劇視察について紹介したが、本節では社会教育司と通俗教育について整理し、戯曲改良との関連について考察してみたい。

まず通俗教育に関しては幾つかの先行研究がある。魯迅研究の側面から通俗教育に着目したものに竹内實『周樹人の役人生活——通俗教育研究会との関係——』（『東方学報』第59冊 京都大学人文科学研究所紀要 第103冊 1987年3月）があり、同論文は魯迅研究の立場から1915年に発足した第二次通俗研究会の活動内容や小説改良に焦点を当てたものである。魯迅の北京時期については陳漱渝『魯迅在北京』（天津人民出版社 1978年）がある。また第二次通俗研究会について教育方面から日中を比較し論じたものに上田孝典『民国初期中国における社会教育政策の展開——「通俗教育研究会」の組織とその役割を中心に——』（『アジア教育史研究』アジア教育史学会 第14号 2005年3月）が、天津での通俗教育に着目した論文には戸部健『中華民国北京政府期における通俗教育——天津社会教育辦事処の活動を中心に——』（『史学雑誌』第113編第2号 2004年）があるが、戸部論文は1915年に天津に設置された社会教育弁事処の活動を中心に述べたものであり、いずれの論も民国元年の社会教育に関しては簡潔に触れてはいるものの、元年時点の制度や戯曲改良にまで言及してはいない。孫瑛『魯迅在教育部』（天津人民出版社 1979年）では魯迅の新劇視察に関しても記述が見えるものの、魯迅日記を基にしており、教育制度と戯曲改良との関わりまでは確認できない。

民国元年の最初の段階では、教育部には学校教育司、社会教育司、歴象司の三司が置かれた⁽⁴¹⁾。学校教育司には普通教育科と専門教育科の二科（実業教育は科に分けず）、社会教育司には宗教科、美術科、編輯科の三科、歴象司には天文科と測候科の二科に分別された。

1912年5月6日に教育部が始動するが、その時の職員録から社会教育司の第一科から第三科までの人物を挙げておく。（下線は筆者による）

第一科 沈彭年 樊炳清 冀貢泉

第二科 周樹人 胡朝梁 許丹遊 洪度

第三科 伍達 王章祐 齊宗頤 徐協貞⁽⁴²⁾

第二科と第三科に魯迅こと周樹人と齊宗頤の名が確認できるが、これは三節にも挙げた通りである。

そしてこの三科であるが、先に宗教科、美術科、編輯科の三科であったのが6月の段階では次のように変わっている⁽⁴³⁾。

第一科 宗教 礼俗

第二科 科学 美術

第三科 通俗教育

天津での新劇視察に赴いた際の魯迅は社会教育司第二科で科学や美術に関して、齊宗頤は第三科で通俗教育に関して管轄する立場であった。

「民国教育部官職令草案」⁽⁴⁴⁾第三条によれば、教育部には普通教育司、専門教育司、実業教育司、社会教育司、礼教司、蒙蔵教育司の六つの司が置かれ、第七条では社会教育司の掌握業務として以下の八つの項目を挙げている。

- 一. 通俗教育会及び講演会に関する事項。
- 二. 博物館図書館に関する事項。
- 三. 美術館美術展覧会に関する事項。
- 四. 音楽会演芸館に関する事項。
- 五. 通俗図書館巡回文庫に関する事項。
- 六. 社会教育書籍編輯所に関する事項。
- 七. 調査統計に関する事項。
- 八. 名跡の保存に関する事項。

ここで演芸は第四項に挙げられ、音楽と共に通俗教育の一部として取り上げられている。

8月になると修正案が出され、教育部には普通教育司、専門教育司、社会教育司の三司を置くことになる。第九条に定められた社会教育司の管轄業務は以下の九つとなった。

- 一. 通俗儀礼改正に関する事項
- 二. 博物館、図書館に関する事項
- 三. 動植物園等學術に関する事項
- 四. 美術館、美術展覧会に関する事項
- 五. 文芸、音楽、演劇等に関する事項
- 六. 調査及び古物収集に関する事項
- 七. 通俗教育及び講演会に関する事項
- 八. 通俗図書館、文庫の巡視に関する事項
- 九. 通俗教育の編輯、調査、企画等に関する事項

この時点で、演劇は第五項に文芸や音楽と同列に挙げられ、通俗教育とは項目を別にすることになる⁽⁴⁵⁾。1914年には文芸、音楽、演劇の項目自体変わらないが、第九項の内容に若干異同が見られる⁽⁴⁶⁾。1915年になると教育部の外郭団体として第二次通俗教育研究会が設置され、そこに小説部、戯曲部、講演部の三部会が置かれた。戯曲部では新旧戯曲の調査と上演、改良、市場頒布される詞曲唱本の調査と収集、戯曲及び評書の審査、戯曲研究書籍の選別、活動フィルム、幻灯フィルム、録音機の調査を行った。戯曲部の主任は教育部社会教育司兪次黄中愷で、調査幹事3名と審査幹事3名、編訳幹事3名の他、会員4名と名誉会員14名がいたのだが、名誉会員の一人に齊宗頤の兄で京劇研究者として著名な齊宗康即ち齊如山の名が見え⁽⁴⁷⁾、戯曲に詳しい専門家の起用を始めたことが分かる。

社会教育司では最初演劇に関する事項は第三科の通俗教育に、次に音楽会や演芸会に関する事項となり、さらに音楽、演劇は文芸と同レベルの事項として取り上げられ、1915年以降は戯曲部として単独の部会となった。これは従来軽視されてきた演劇が、教育面から演劇改良の必要性を重視され、公的な制度に組み込まれていったことを証明している。とはいえ通俗教育に関わる通俗教育研究会が本格的な活動を行ったのは1915年からの第二次

以降であって、1912年の段階では政策上は通俗教育の中に演劇を組み込んだものの、具体的な改良の内容までには及ばなかった。

結

以上、天津における戯曲改良運動の先駆者汪笑儂と戯劇改良社について、また教育政策から当時の教育部での戯曲改良の扱いについて整理したが、総括すれば以下ようになる。

戯曲改良の動きは光緒中から見られたのであり、光緒三十三年には風俗を乱す演劇の上演が禁じられ、劇場の風紀を監督し検閲するのは警察の役目であった。「改革」「革命」へと向かう時代の流れもあり、演劇の改良は急務となった。こうした時期に汪笑儂は戯曲改良に取り組んだが、彼の試みは上演面、演技面での改良よりも主に脚本の内容に対してであった⁽⁴⁸⁾。しかし元来知識人であり、舞台上で自ら演技が出来、脚本を編集できたことで、済南や天津での戯劇改良社の長として迎えられることになる。

民国元年には教育部の通俗教育の取り組みの一環として演劇事業は警察庁管轄から教育部が関与することとなった。天津では戯曲の「行会」であった正楽育化会が1913年からは教育部の管轄となり、育化会の下に成立した芸劇改良社が戯曲改良を担っていく。また民国元年に誕生した戯劇改良社も汪笑儂と戯曲改良を目指すものの、活動の重点は芸劇改良社へと移っていく。戯劇改良社は1914年3月まで存続したというが、その後汪笑儂は1916年12月に上海に戻り俳優生活を続け、持病の悪化により1918年に没した。

教育部の戯曲改良への取り組みは、最初は「通俗教育」の一環として、次には「音楽会演芸館に関する事項」として、そして「文芸、音楽、演劇等に関する事項」として音楽や文芸と同等に取り上げられるようになる。1915年に通俗教育研究会が発足してからは戯曲部も設置され、戯曲改良を重視していたことがうかがえよう。清代には風俗を乱すものとして取締の対象であった演劇が、次第に人々を感化し啓蒙する役割を期待され、民国期になってからは演劇が教育的な役割を担うべく教育制度に組み込まれたことが裏付けられる。もっとも済南や天津においては通俗教育研究会成立よりも先に戯劇改良社が設置されており、戯曲改良自体は清末からの流れを受けていると見るべきであろう。戯曲改良はまずは内容面からの改良であり、風俗改良から次第に啓蒙的な側面を持つものへと変化したといえる。

民国期に入ってから戯曲改良が通俗教育の一環となり、教育と演劇とが結びつくことで教育機関つまり学校という組織内部から戯曲の改良を実践する動きが出てくる。南開大学新劇団の例がそうである。そしてこの学校演劇から旧来の伝統劇とも異なる新劇が生まれていったものと考えられる。民国期の学校における新劇活動に関しては今後さらに検証を進めていきたい。

注

- (1) 三作品とは『一圓銭』(1915年)『一念差』(1916年)『新村正』(1918年)である。
- (2) 『五四時期の学生演劇——天津南開新劇団と北京大学新劇団——』(『お茶の水女子大学中国文学会報』第二十七号 2008年4月)
- (3) 『晩清に於ける演劇改良運動(二・完)——旧劇と明治の劇壇との交渉を中心として——』(中村忠行『天理大学学报』第八輯 1952年) 54頁参照。中村氏の考証によれば、光緒三十二年には両江総督端方による戯曲改良の上奏がなされていたという。
- (4) 注(3) 56頁参照。
- (5) 注(3) 57頁参照。
- (6) 注(3) 54頁参照。中村氏は『新聞報』三月二十七日の記事を基にしている。
- (7) 『北九州大学外国語学部紀要』第67号(1989年12月)。
- (8) 『戯劇芸術』(1988年第3期)。
- (9) 同論文の汪笑儂の天津時期に関する記述は以下の通りである。「辛亥革命後、汪笑儂は天津正楽育化会副会長に選出され、在職中に嚴繁蓀、卞廣言、などの協力を得て、「易俗改良社」を結成し、新しいタイプの京劇俳優の養成を目指す等、旧劇の改良、新人の発掘、育成に尽力した。」(14頁)
- (10) 「名伶小史 汪笑儂略史」(作者大同『春柳』第一年第一期 天津春柳発行所)
- (11) 『菊部叢刊』「伶工小伝」に汪笑儂の記述もある。(民国7年 上海交通図書館発行、筆者が見たのは『平劇史料叢刊』劉紹唐、沈葦窓

主編 伝記文学出版社印行のもの。358頁参照。）

- (12) 汪笑儂の編んだ脚本は傳論文によれば38種という。『哭祖廟』と『馬前潑水』は『春柳』（第一期 1918年）に脚本がある。
- (13) 「二十世紀大舞台叢報招股並簡章」参照。（『二十世紀大舞台』は1904年9月創刊。大舞台叢報社編。第二期まで刊行した後発禁処分を受けた。汪笑儂の脚本『長楽老』や『綾金箱』が掲載されている。）
- (14) 注（7）19頁参照。
- (15) 注（7）23頁、24頁参照。確かに『哭祖廟』の脚本を例に取れば、三言、三言、四言のリズムが続き、フレーズが短めである。
- (16) 注（10）22頁参照。
- (17) 注（10）22頁に「日は久しからずとも、企画は非常に詳細を尽くすものであった。魯人今迄之を思う。」とある。
- (18) 王鐘声（？-1911）生年については1882年か1874年との二説がある。本名は王熙普。浙江省出身。上海教会学堂に学び、ドイツに留学したという。法政学堂監督、洋務局総弁を歴任するが、1907年上海で新劇劇団春陽社を組織する。また演劇学校である通鑑学校を設立した。春陽社解散後1908年には北京や天津でも公演を行い、辛亥革命の際上海での蜂起に参加したという。1911年12月天津に来た際、逮捕され処刑された。
- (19) 『話劇創始期回憶録』（徐半梅 中国戯劇出版社 1957年 43頁-44頁参照。）
- (20) 『王鐘声事蹟二攷』（吉川良和 『一橋社会科学』第二号 2007年3月）106頁参照。
- (21) 『王鐘声と辛亥前後の北京劇界』吉川良和 『多摩芸術学園紀要』第3巻 1977年 50頁 10節の註3参照。）
- (22) 注（21）49頁参照。
- (23) この記述によれば1913年には汪は北京にいたことになる。
- (24) 『大公報』（天津版）第3524号。民国元年五月二十八日（壬子年四月十二日）の「本埠」記事。
- (25) 『晚清北京の戯曲改革と秦腔』（吉川良和 『東京都立大学人文学科 人文学報』第112号 1976年）第4節「義務劇の発生とその意義」43頁-45頁参照。同論文によれば、租界のあった天津や上海では夜の上演が許されていたが北京では夜劇を禁じられていた。しかし義務劇であれば夜も上演可能だったという。吉川氏は夜劇の上演により照明を常用するようになり、舞台と演技を見る習慣が生まれたという。
- (26) 『大公報』（天津版）第3796号。民国二年三月七日（旧曆一月三十一日）の「本埠」記事。
- (27) 『大公報』（天津版）第3809号。民国二年三月二十日の「本埠」記事。
- (28) 『大公報』（天津版）第3913号。民国二年七月三日の「本埠」記事。
- (29) 『大公報』では3月7日、5月16日、6月21日、7月8日、8月4日、6日の6回ほど公演記事や広告が見える。
- (30) 齊寿山（1881-1965）のこと。京劇評論家で著名な齊如山の弟。河北高陽の人。ドイツに留学し、1912年に教育部社会教育司第三科科員に、後視学となる。1927年秋蔡元培が大学院院長に就任した際、南京にて同院秘書を務めた。
- (31) 『魯迅日記』（『魯迅全集』第14巻所収 人民文学出版社 1981年）5頁参照。
- (32) 注（31）に同じ。
- (33) 『魯迅全集』第17巻（学習研究社）日記I（壬子日記）18頁参照。
- (34) 『大公報』（天津版）第3913号。民国二年七月三日の「本埠」記事。
- (35) 『魯迅全集』（人民文学出版社 1981年）集外集「著者自述伝略」「自伝」参照。82頁-87頁。
- (36) 『教育雑誌』第4巻第4号（台湾商務印書館影印版）。「記事 学事一束」参照。
- (37) 注（33）に同じ。
- (38) 注（33）に同じ。
- (39) 広和楼は清末に南市に建てられた戯園。南市東興大街に位置したが設計、維持管理の悪さから倒壊し1924年に取り壊された。また丹桂園は1910年に建立され、七区平安街10号（現在の南市平安大街）に位置した。最初は丹桂茶園と名乗り、600名余りの観客を収容したという。（『天津老戯院』天津市档案馆主編、周利成・周雅男編著 天津人民出版社 2005年 217頁-219頁参照。）
- (40) 『天津史——再生する都市のトポロジー』（天津地域史研究会編 東方書店 1999年）168頁参照。
- (41) 『教育雑誌』「記事」（第三巻第十一期 79頁）による。「学事一束」の「教育部内部之組織」参照。
- (42) 『教育雑誌』（第四巻第三号 16頁）参照。
- (43) 『教育雑誌』（第四巻第四号 25頁「大事記」及び「学事一束」）参照。
- (44) 『教育雑誌』（第三年第十二期 63頁）附録による。
- (45) 「臨時大總統令公布參議院議決修正教育部官制」（1912年8月）原載は『教育雑誌』（第四巻第六号）、筆者が見たものは『中国近代教育史史料彙編・教育行政機構及教育団体』（朱有瓚、戚名琇、錢曼倩、霍益萍編 上海教育出版社 1993年 109頁-110頁）参照。
- (46) 「教育部官制公布」（1914年7月修正）原載は『教育公報』第2冊（『中国近代教育史史料彙編・教育行政機構及教育団体』（朱有瓚、戚名琇、錢曼倩、霍益萍編 上海教育出版社 1993年 111頁-112頁））参照。この時の項目は以下の通り。一、通俗教育及び講演会に関する事項、二、感化に関する事項、三、通俗儀礼に関する事項、四、美術館及び美術展覧会に関する事項、五、文芸、音楽、演劇に関する事項、六、動植物園等学術に関する事項、七、博物館、図書館に関する事項、八、各種通俗博物館、通俗図書館に関する事項、九、

鈴木 汪笑儂と天津戯劇改良社

公衆体育及び遊戯に関する事項。2項目と9項目で新たに「感化」や「体育、遊戯」に着目している。

- (47) 『魯迅生平史料彙編』第三輯（薛綏之主編 天津人民出版社 1983年）147頁「通俗教育研究会職員録」参照。原載は『通俗教育研究会第一次報告書』附録。）
- (48) 傅秋敏『論汪笑儂的戯曲改良活動』（注（8）、53頁）によれば、汪は最初内容の刷新を求め形式の改革に関しては重視していなかったが、天津で戯曲教育に従事してからは、戯曲の古い形式や厳格な型や規範が、観衆の受容度の妨げとなることに気づいたのだという。